



大宮保育園の屋上に取り付けられた「おひさま発電所」の太陽光パネル(上)。発電量がわかる表示板が子どもたちに人気と話す北尾園長



Natural Energy シリーズ 自然エネルギーへの挑戦

①広がる「おひさま発電所」

NPO法人「きょうとグリーンファンド」(京都市下京区)

福島第1原発の事故を受け、原発依存のエネルギー政策をこのまま続けていいのかという課題が日本社会に突きつけられています。こうしたもと、「原発に頼らない安全でクリーンなエネルギー社会を」と自然エネルギー普及に取り組む動きが市民の中に広がっています。京都府内各地の草の根の取り組みをシリーズで紹介しします。第1回目は、太陽光パネル設置を促進するNPOの取り組みです。

市民の寄付で費用援助する

保育所や幼稚園などと協同で太陽光パネルを設置しているのは、NPO法人「きょうとグリーンファンド」(板倉豊理事長、京都市下

京区)。2000年に、温暖化防止に有効な節電・省エネ推進と自然エネルギー普及を目指して設立されました。ファンドの仕組みは、市民から集めた寄付を「おひさま基金」に積み立て、その基金

「電所」を設置、稼働させてきました。15カ所の発電量総計は、年間10万3000キロワアワー。一般家庭約300世帯分に相当します。

同ファンドは97年に京都市で開かれたCO

けです。

太陽光パネルを民間の保育所などが設置する場合、10キロワのパネルで1000万円程度が必要とされています。半額は国から補助されますが、5、600万円は施設が用意しなければなりません。そのため、民間事業者のパネル設置は進まないのが現状です。

そこで、同ファンドが始めたのが市民から寄付を募る方法。「国の助成制度が不十分な

れてくれるところがいい」と言います。

パネル設置した保育園では園内に発電量が一目で分かる表示板を設置し、子どもや保護者が、自然エネルギーを体感することで環境意識を育むことを目指しています。

大宮保育園もパネル設置を機に、職員、保護者、園児たちと一緒に環境学習を始めました。

15施設に太陽光パネル設置

を運用して保育園などの太陽光パネル設置を手助けします。基金への寄付を通じて、市民には自然エネルギーへの意識を持ってもらうのがねらいです。

この10年間で、府内15カ所の保育所や幼稚園などに「おひさま発

P3(第3回気候変動枠組条約締約国会議)で、環境に関心を持つようになった主婦らが「京都に自然エネルギーを普及させよう」と立ち上げました。

ファンドのパネル設置第1号は、法然院(京都市左京区)の「森のセンター」。寺の所有する森を観察するための学習施設で、ここにパネル設置を計画していることを聞いた会

員が「せっかくなら市民参加でパネルを設置しませんか」と話を持ちかけたことがきっかけ

ら、市民の手で普及させよう。同ファンド事務局長の西啓子さん(61)は動機をこう語ります。

節電だけでなく環境学習も

2006年1月に10キロワの太陽光パネルを設置した大宮保育園(京都市北区)。園で使用する電気の約半分を太陽光発電でまかないます。

北尾育子園長(51)は「電気代の節約になるだけでなく、ファンドが環境学習にも力を入

「使っていない灯りの電気を子どもたちが消すようになり、夏祭の使い捨て食器を止めようと保護者が提案してくれました。意識が変わった」と北尾園長は喜びます。

同ファンドが今直面している問題は、事業仕分けなどで国の補助金の先行きがはっきりしないこと。今年度の補助金の受け付けはまだ行われていません。

大西さんは「市民の力でここまでやってきました。補助金を継続させ、京都中の保育所や幼稚園にパネルを掲げたいですね。原発に依存しない社会を切り開いていければ」と力をこめました。

(辻井祐美子記者)